

木簡学会が成立して十年目に入り、この『木簡研究』も一〇号を数えることになった。今年は九月早々に「長屋王邸」跡から三万点とも予想される膨大な木簡が出土したが、それは本誌の編集に携わっている立場からすれば、「うれしさも中ぐらい」といった感じであつた。それはいうまでもなくビッグニュースではあつたが、それと同時に他方では今まで通りの刊行が出来るか懸念される事態も予想されたからである。しかし、今年もまたどうにか研究集会に間に合いそうである。無理を聞き入れて御協力下さった幹事の皆さんに御礼を申し上げたい。

本号の編集については、創立十周年を記念した特別企画をしようとの考えも無かつたわけではないが、記念の企画は別途に考へることとし、従来の編集の原則を踏襲することとした。本誌の先づ第一の任務は正確な木簡の出土状況を伝えることにあると考えたからである。そのような立場から、寺崎保広氏に今年三月までに木簡を出土した遺跡およびその報告書等の一覧を作成していただいた。これは数年来の懸案であったもので、六〇一〇号の総目次とあわせて活用して頂きたい。

それに昨年度の木簡の出土状況と、昨年の研究集会で発表いただいた石井進、沢田正昭両氏に御寄稿いただき、さらに工藤元男氏からも労作を投稿いただき、充実した編集をすることができた。長年の懸案であった木簡の保存処理に関する論稿を掲載することができたことも、また十周年にふさわしい事であるとおもう。

平城宮跡の木々の紅葉が風に舞いおち、風が肌寒く感じられる頃が編集の最後の追い込みの時である。この十年間を振り返ってみると、もう少しバラエティーに富んだ編集をと思ったことも度々であった。しかし結局は木簡出土状況のより正確な情報の提供に終始してきたといってよいであろう。というよりはそれに終始するのが精一杯であったというのが偽らざる実感である。二百ページにも満たない小冊子でも、その編集を進めるとなると、やはり献身的な助力を何人かの人に仰がなければならない。ところが、直接に編集関わる幹事の多くは十年前と変わらず、わたくしも年ごとに編集の実務に割ける時間が少なくなってきた。編集の体制を考えなければ早晚刊行に支障が生じるのはなかろうか。そう思うのがわたくしひとりの思いすこしあつてくれれば、とおもう昨今である。

(佐藤宗諱)